様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １１ 日現在

機関番号：１２６１３
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ１２４５３

研究課題名（和文）カタルーニャ独立問題に伴う言語多様性継承政策のパラダイムシフトに関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Paradigm Shift in Linguistic Diversity Inheritance Policies in the Context of the Catalan Issue

研究代表者
寺尾　智史（TERAO, Satoshi）

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：３０４５７０３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本課題の着眼点であるカタルーニャ自治州の言語政策については、与党が政権維持をするために地方の協力が不可欠な状況となっており、スペイン政治で地域言語のプレゼンスがこれまで以上に高まっている。他方、言語文化の斉一化指向の強い守旧派の間に警戒感を植え付け、分裂と対立は深刻化している。この現状に鑑み、欧米での言語多様性継承施策の現状と比較対照を行うため、言語多様性継承が比較的スムーズな東南アジア諸地域について調査した。本地域では、政治による言語政策に囚われることなく、コミュニケーション場面に最適化した言語選択が行われており、欧米の硬直的な言語多様性継承策の相対化がより重要な課題として浮き彫りになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
1. 研究成果の学術的意義――カタルーニャ語の復興運動とその成果が、スペイン内外の少数言語復興運動にどのような影響を与えているのか、もしくは、その影響なく自律的な多言語社会を維持・発展させているのかを、多くのフィールドを比較対照しつつ、多角的に明らかにしたことである。
2. 研究成果の社会的意義――カタルーニャにおける言語復興の道のりを手ばなしで評価するのも、他方、独立問題をはじめ言語文化の政治化という観点からことさら非難するのも、一方的であることを示した。この前提でことばの多様性についてその価値を議論し、現代の時代背景に合致した継承モデルを構築していく重要性を示した。

研究成果の概要（英文）：With regard to the language policy of Catalonia, the focus of this issue, regional cooperation has become essential for the ruling party to stay in power, and the presence of regional languages in Spanish politics has increased more than ever. On the other hand, this has instilled a sense of caution among the old guard, which is strongly oriented toward linguistic and cultural uniformity, and divisions and conflicts are becoming more serious. In light of this situation, I conducted a survey of Southeast Asian regions where linguistic diversity inheritance is relatively smooth, in order to compare and contrast the current state of linguistic diversity inheritance policies in the Western Countries. In this region, language choice is optimized for communicative situations without being constrained by political language policies, highlighting a more important issue relative to rigid Western measures for language diversity inheritance.

研究分野：社会言語学

キーワード：カタルーニャ語　言語多様性継承　小数言語　言語政策　ミランダ語　バスク語　ガリシア語　バレンシア語

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

イベリア半島北東部、地中海に面するカタルーニャは、1930 年代にはじまり 1975 年に至るフランコ時代の圧政の中で、カタルーニャ語を核とする独自の言語文化が抑圧され、衰退に抗する術を失い、この地域の多くの人々の母語であったカタルーニャ語は衰微する一方であった。この状態を反転し、カタルーニャ語使用を劇的に回復する理論的支柱となったのが、社会言語学者アラシル Lluís Vicent Aracil i Boned （1941 年～）が唱えた「言語正常化」（カタルーニャ語で Normalització Lingüística）というモットーと、これに応じて編み出された方法論である。フランコ死後の民主化する過程において、その手法は存分に応用され、功を奏する形でカタルーニャ地方、現在のカタルーニャ自治州におけるカタルーニャ語の法的ステイタスの確立と、これが目的としたカタルーニャ語言語使用は大幅に盛り返すこととなった。国家公用語以外のことばが一方的に衰亡するのが常態となってしまっている近現代において、それに充分に抗っているといえる、このカタルーニャ語における言語正常化運動は、言語マイノリティが話す「少数言語」の復興、および次世代への言語継承の一典型となったのはいうまでもない。さらに、社会言語学上の理論的展開としては、これを一つの母胎として、さらに法学等を巻き込む形で、言語使用についての権利を定めた「言語権」の考え方が定着するに至った。また、南米パラグアイのグアラニー語政策を典型とするように、いわゆる「スペイン語圏」（国家公用語がスペイン語となっている国・地域）でのカタルーニャ語言語正常化モデルの普及が図られることになった。

しかしながら、2010 年代に先鋭化していった、カタルーニャのスペインからの独立運動と、カタルーニャ自治州政府の独立方針に伴うスペイン中央政府との深刻な政治的対立によって、状況が大きく変動している。これまでの、「カタルーニャ語をスペイン語と肩を並べる存在とするために、法的ステイタスを高め、カタルーニャ語での教育機会、行政や司法での使用、社会や家庭内での使用をスペイン語と同等もしくは同等以上のレベルに高める」という方針から逸れ、スペイン語との関係性を無にし、カタルーニャ語だけの社会を築こうとしているようにも見える。他言語との共存に見切りをつけ、カタルーニャ語単独の社会構築を目指すことは、外部的には「変節」といえるような大きなインパクトを受けるものであるが、他方、近年、この点についてカタルーニャ社会言語学からは是非論があまり聞こえてこなかったのが現状であった。

２．研究の目的

カタルーニャ自治州におけるカタルーニャ語復興をめぐっての言語政策の評価は、カタルーニャ独立問題の先鋭化によって、とりわけそれを受け止めてきた外部でどのような受け止めになったのかを究明する。

３．研究の方法

カタルーニャ語をめぐる言語政策の動向について、経年的変化にかかわる情報収集をするとともに、カタルーニャ語政策の影響を受ける、もしくは影響の少ない他地域の言語政策についてその現状をフィールドワークおよび史資料を収集する手法で比較対照する。なお、研究期間中の大部分を占めることとなった、新型コロナウイルス感染症流行（COVID-19）によるフィールドワークの制限に従い、当初の予定に比べ文献資料の渉猟と成果の発表に重点を置くこととした。

４．研究成果

研究期間中である 2021 年、イベリア半島の言語マイノリティでも最も零細で、過疎も含め危機的な状況にあるミランダ語のモノグラフ単著『ミランダ語が生まれたとき―ポルトガル・スペイン辺境における言語復興史』を出版した。これは、カタルーニャ語をはじめとした、イベリア半島の少数言語復興運動の動向を真正面から受け、左右される言語の代表として、本課題研究期間、さらには、それに遡る 1990 年代から地道にフィールドワーク、史資料収集を行ってきた成果である。なお、この書籍の出版については、日本学術振興会の研究成果公開促進費の助成を受けた。

上記等の成果公表にも生かされることとなった、今回課題についての調査と考究の成果として挙げておきたいのは、ミランダ語復興運動のようなカタルーニャ語の動向により影響されやすい場においては、言語復興や言語継承をめざす現場での「カタルーニャ言語正常化モデル」への幻滅と、独自の言語使用活性化方案の策定への動きを補足できたことである。

他方、カタルーニャ言語正常化モデルが参照されることがより少ない場、例えば、COVID-19 が沈静化した後に実施できた 2024 年 3 月マレーシアのペナン地域やサバ地域でのフィールドワークにおいても、新しいモデルを探る手がかりがあることが鮮明となった。これらの事例を参照しつつ、いかに理論や方策として組み立てていくかについては、今後の重要な課題としたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 寺尾智史	４．巻 6
２．論文標題 「言語多様性継承の隘路を探るー自動翻訳、手話、漢字の可能性から」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 包聯群編『現代中国における言語政策と言語継承』	６．最初と最後の頁 69-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 寺尾智史	４．巻 8(1)
２．論文標題 「拡張タンデムラーニングの実践と展開―ファシリテーターの役割を中心に」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『九州地区国立大学教育系・文系研究論文集』	６．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Satoshi TERAO	４．巻 -
２．論文標題 Reconsidering our linguistic deiversity from Mirandese: the "lastest" and "least" among Romance languages	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Linguistic Regionalism in Eastern Europe and Beyond	６．最初と最後の頁 257-273
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3726/b14464	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 寺尾 智史	４．巻 41
２．論文標題 パウリテイロシュはスポーツか ： カポエイラとの比較から	５．発行年 2024年
３．雑誌名 一橋大学スポーツ研究	６．最初と最後の頁 15～30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15057/82989	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　2件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 寺尾智史
2．発表標題 「イベロロマンス語としてのミランダ語再考ースペイン語・ポルトガル語とどこまで違い、どこまでが同じなのか」
3．学会等名 関西スペイン語学研究会
4．発表年 2022年

1．発表者名 寺尾智史
2．発表標題 「言語多様性継承の隘路を探るー自動翻訳、手話、漢字漢文の可能性から」
3．学会等名 第10回 日中国際ワークショップ「現代中国における言語政策と言語継承ー多言語の視点から」（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 寺尾智史
2．発表標題 「播州ことばから見つめる言語的マイノリティの周縁意識と多様性保持のストラテジー」
3．学会等名 第33回ひと・ことばフォーラム研究会「移動とメディアの言語的コンプレックス」（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 寺尾智史
2．発表標題 「ヨーロッパ文学の中でのロマンス諸語言語多様性の語られ方」
3．学会等名 日本ロマンス語学会 第59回大会
4．発表年 2021年

１．発表者名 寺尾智史
２．発表標題 赤道ギニアの言語状況―ガバス『ヤシの木に降る雪』(2012) をたなごころに
３．学会等名 関西スペイン語学研究会　第415回例会
４．発表年 2018年

１．発表者名 寺尾智史
２．発表標題 携帯多言語双方向翻訳機における「多言語状況」の分析
３．学会等名 第16回国際都市言語学会年会（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 寺尾智史
２．発表標題 非アングロ・サクソン系植民地におけるアングロ・サクソンの陰影―ギニア湾岸アフリカを中心に
３．学会等名 シンポジウム「アングロ・サクソン侵略の系譜」
４．発表年 2018年

１．発表者名 寺尾智史
２．発表標題 モバイル・ライブスが作る弱小言語のグローカルな世界―検索エンジン系自動翻訳のマルチ言語化を中心に
３．学会等名 第27回ひと・ことばフォーラム モビリティーズ―モバイル・ライブズが作る世界
４．発表年 2019年

１．発表者名 寺尾智史
２．発表標題 母語を第2習得言語で教えることの第2言語習得への効果ー実践からの考察
３．学会等名 平成30年度シンポジウム「第二外国語学習の現状と課題」
４．発表年 2019年

〔図書〕　計5件

１．著者名 寺尾 智史	４．発行年 2021年
２．出版社 三重大学出版会	５．総ページ数 208
３．書名 ミランダ語が生まれたとき－ポルトガル・スペイン辺境における言語復興史	

１．著者名 山下　仁・他（編著）、寺尾　智史（著）	４．発行年 2021年
２．出版社 三元社	５．総ページ数 390
３．書名 対抗する言語（寺尾担当部分：「第6章　対抗する言語としてのアイオレオ語－ボリビア・パラグアイ国境線からのまなざし」・「コラム　アルピリの栄光と挫折－アイオレオの在パラグアイ・ボリビア大使への期待と結末」 を単独で）	

１．著者名 Keiko TAKEMURA, Francis B NYAMNJOH (Eds.), Satoshi TERAO	４．発行年 2021年
２．出版社 Langaa RPCID, Cameroon	５．総ページ数 326
３．書名 Dynamism in African Languages and Literature: Towards Conceptualisation of African Potentials Keiko TAKEMURA, Francis B NYAMNJOH (Eds.), Satoshi TERAO (寺尾担当部分: Socio-linguistic Dynamism among Languages: Sketching from Angola as a Frame of Reflection. を単独で)	

１．著者名 坂井　一成、八十田　博人（編著）、寺尾　智史（著）	４．発行年 2020年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 240
３．書名 よくわかるＥＵ政治（寺尾担当部分:「言語（V-13）」,「少数言語・少数民族（V-14）」を単独で）	

１．著者名 『現代地政学事典』編集委員会	４．発行年 2020年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 888
３．書名 現代地政学事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関